

巻頭言

皆、愛に包まれて生まれる ～愛のカプセル～

立教小学校チャプレン 下原 太介



「こんな家に生まれたくなかった！お母さんの子どもになんて、生まれたくなかった！！」

ずっとずっと昔、私が母に投げつけた言葉です。

私は長野県の山間地で、日本聖公会の司祭の家系に生まれ育ちました。私が小学生だったある日、同級生たちが「町の墓地の中に、ドラキュラのお墓を見つけた！！」と、教室で騒いでいました。私は「ドラキュラのお墓??僕も見たい！！」と思い、放課後、再び、ドラキュラの墓を見に行こうとする同級生たちの後を追いました。

“あれ?この道…”、よく見知った、その道に、同級生たちの後を追う私の足は止まり、私の心の中にあつた好奇心が、一瞬にして言い知れぬ不安に変わったことを今でも鮮明に覚えています。自分一人、黙って引き返すこともできず、その気持ちを押し隠したまま、同級生たちが騒ぎ立つ、そのドラキュラの墓の前に、私も立ちました。

うっそうとした木立に囲まれ、山肌を切り拓いて数百基、日本古来の伝統的な墓石が立ち並ぶ中、その墓石群から少し離れた所に、それはひっそりとありました。たった一つだけ、天を突くように建てられた石の十字架が、確かにありました。

私は、小さな頃、その十字架の周りをほうきで掃いて、花を立て、綺麗に飾ることが大好きでした。私にとって、そこはとても神聖で、大好きな場所でした。その日までは…。

ドラキュラ伝説の発見に興奮する同級生たちの中で、私は、ただ一人、魔女狩りを恐れるかのように“この場から早く逃げた

い！！”と、心から思いました。すると、探究心の強い、ある一人の同級生が意を決したように、十字架の後ろに回り込み、私が恐れていた真実を暴いたのです。

「下原家って、彫ってある！！！」

その日以来、私はドラキュラの子孫になりました。

「近づくな！血を吸われる。」

「コウモリになって、飛んでみる。」

「十字架嫌いなのに、なんでお墓が十字架なんだ?変なの!」…

同級生たちの嘲笑に耐えられなくなった、ある日の帰宅後、私は母の心を刺しました。

「こんな家に生まれたくなかった！お母さんの子どもになんて、生まれたくなかった！！」

そう言い放った後、母とどんなやり取りをしたのか、その夜、どのように過ごしたのか、全く覚えていません。私が投げつけたその言葉を一心に受けた時の母の顔さえも。

数週間後、同級生たちのドラキュラブームはドッジボールへと移り変わり、私も何事もなかったかのように、その仲間に加わり、いつもの日常へと戻りました。しかし、私の心の中には小さな、いいえ、大きな一本の棘が残り続けました。

「お母さんに酷いこと言っちゃった。きつと、凄く、凄く酷い言葉だったのかも…お母さん、悲しんだらうなあ。なんてこと、言っちゃったんだろう。」

「親ガチャ」という言葉を近年、よく耳に

するようになりました。埋められない溝がいよいよ深刻化しつつある一極集中社会や格差社会の中で、子どもは自分自身が生まれてくる地域や家庭環境、そして、親自体を選ぶことができず、全ては運任せ、生まれ落ちた場所任せ。それを、硬貨を入れて、レバーを回すとカプセルに入った小さなオモチャが無作為に出てくる「ガチャガチャ」という小型自動販売機になぞらえた言葉です。「言い得て妙」的なインパクトで、瞬く間に日本中に広がりました。



小学生だったあの時、私はこの「親ガチャ」を母に向かって振りかざしました。しかし、その後で、私の心に残った大きな棘は「子ガチャ」となって、私に跳ね返ってきました。

「お母さん、悲しんだらうなあ。なんてこと、言っちゃったんだらう。…僕みたいな子どもになんて、生まれてきてほしくなかったらうなあ。僕みたいな子どものお母さんになんて、なりたくなかったらうなあ。凄く、凄く酷い言葉を言っちゃった…」

母へ素直に謝れないまま、何も伝えられないまま、自分自身の心の棘を抜けないまま歳を重ね、父となり、そして、3年前に立教小学校のチャプレンとなった私は、立教小学校の正門をくぐり、一つの彫像を目にしました。

そこには、片手で子どもの手をしっかりと握りしめ、もう片方の手で子どもを優しく抱き寄せる母親の像がありました。そして、台座には、こう銘示されていました。

『汝を生める者を喜ばせよ』

この言葉を見つめ、私は自らを振り返りました。

「私は、これまで、母を喜ばせることができたのだろうか？自分を命懸けで生んでくれた母を、今、幸せにできているのだろうか？」

神の御子、私たちの救い主であるイエス・キリストの誕生を祝うクリスマス。世界中が、その良き訪れに感謝し、喜びの祈りを捧げます。しかし、その一方で、その日から壮絶な日々を歩み始めた聖家族としての御子イエス・キリストの苦しみと悲しみ、聖ヨセフの夫としての葛藤、父としての悩み、聖母マリアの妻としての不安、母としての戸惑いに心を留め、それが自分自身の罪の贖いのための身代わりに因るものであると、自らの罪に向き合い、沈黙と懺悔のうちに、その日を過ごす人々は、あまりに少ないようにも思います。

聖母マリアによる神の御子イエス・キリストの受胎。誤解を恐れずに言えば、それは、もしかしたら、究極の「子ガチャ」であったようにも思います。彼女の信仰と純潔ゆえの受胎にも関わらず、謂れなき離縁の危機と不貞の罰としての処刑の恐怖に晒され、出産後は当時の為政者の暗殺から逃れるためにエジプトでの難民生活を強いられた苦しみの日々。そして、何よりも、まさに命を懸けて生み、人生を捧げて育てた愛する我が子が十字架への磔刑という極刑で命を奪われる、その惨劇を目の前で見届け、その亡骸を自らの手で十字架から下ろし、抱き締めなければならなかった、あの日。

彼女の生涯の一体どこに、母としての幸せと喜びがあったのでしょうか？

私たちが今、生きている社会の価値基準からすれば、聖母マリアのような生涯は、子どもを生んだ母としては、「子ガチャ」の完全なるハズレくじです。そして、それを翻してみれば、ナザレのイエスは彼女の子どもとし

ては酷い、酷い親不孝者です。

しかし、私たちは決して忘れてはなりません。母としての、父としての、子としての、そして、人としての幸せや喜びを決めるものは、生まれてくる子の資質や才能、また、生み落とされる場所や家庭などでは決してないということ。

聖書には、こうあります。

『わたしはあなたがたに最高の道を教えます。…愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。…愛がなければ、無に等しい。…愛がなければ、わたしに何の益もない。…愛は決して滅びない。…信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。愛を追い求めなさい。』（コリントの信徒への手紙Ⅰ第12～14章抜粋、新共同訳 \*…は筆者による中略）

使徒聖パウロの口を通して、このように語らせた主イエス・キリストが、完全なる愛をもって聖母マリア、いいえ、我が母マリアを愛していたことは疑いようがありません。確かに、彼女の生涯は苦難と悲しみに満ちてはいましたが、それ以上に、我が子イエスからの豊かで、深い愛を与えられていたのです。

磔になり、息を引き取る直前、贖い主イエス・キリストは、独り残される我が母マリアの身を案じ、愛する弟子に、こう語り掛け、彼女を託します。

『見なさい。あなたの母です。』そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。』（ヨハネによる福音書第19章27節、新共同訳）

私は、この遺言に、主イエス・キリストの母マリアへの無限の愛を感じずにはいられません。完全で、無限の愛は、この世界の苦しみや悲しみを超越し、苦境の中でも生きる希

望を与え、絶望の中でも生きる理由となるのです。母マリアは、「子ガチャ」の完全なるハズレくじの中で、我が子イエスからの聖愛のみによって生き抜き、生かされ、聖化され、聖母となったのです。

愛する喜びは生きる希望になる。愛される喜びは生きる理由になる。愛こそ、全てなのです。

子に愛されれば、ただそれだけで、全ての母は喜びを感じるのです。また、父も。立教学院の児童、生徒、学生たちよ、愛によって『汝を生める者を喜ばせよ』。

そういえば、「ガチャガチャ」はアタリと思えるオモチャでも、ハズレと思えるオモチャでも、どんなオモチャでも、しっかりとした丈夫なカプセルに守られて、私たちのもとに届きます。

大切なのは、どんな存在でも守られて、祝福されて生まれてくるということです。私たちは、愛に包まれて生まれてきたのです。

私たちも愛と感謝をもって、クリスマス之夜、この世界に生まれる神の御子を優しく包み込むことができますように。



立教小学校にある母子像